

〔資料〕

## 在宅看護実習の評価に関する国内の文献検討

前田和子\*

### LITERATURE REVIEW ON THE EVALUATION OF CLINICAL PRACTICE OF HOMECARE NURSING IN JAPAN

Kazuko MAEDA \*

キーワード：在宅看護、臨地実習、評価、文献検討

Key words : homecare nursing, clinical practice, evaluation, literature review

#### Ⅰ. はじめに

在宅看護では療養者と家族を切り離して支援することは困難であり、家族との関わりが必須であること、チーム医療のメンバーとしての役割と、一方で看護の役割を自覚し、その専門性を発揮することが求められている。在宅看護実習は他の看護学実習と異なり、学校によって実習形態や施設の種類、実習期間に幅があること、療養者宅という「場」に学生が訪問看護師に同行し看護の実際を学ぶという特徴がある。

2009年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正（以降、カリキュラム改正または新カリキュラムとする）により、在宅看護論は「統合分野」に位置づけられ単位数も増加し、在宅で生活する対象の多様な価値観、生活背景を尊重しつつその人らしい生活が送れるよう援助する内容となった。従来の在宅看護実習では、対象の健康課題の理解や、在宅看護で求められる看護技術の習得状況といった側面を評価することに重点が置かれてきた。加えて今後は、対象者の価値観に寄り添うことができたか、対象者自らが希望に満ちた目標に向かって生活を営むための看護が実践できたかという「考え方」の視点からの評価も求められている（御田村ら、2011）。さらにカリキュラム改正後は在宅の終末期看護に関連する内容も含んでおり、今後は在宅における「看取りの看護」の教育方法およびその評価方法の検討（種市ら、2011）など、新カリキュ

ラムに対応した実習方法や学びの評価の検討が必要である。

以上のように、在宅看護実習は、限られた実習期間・形態を有効に生かし、「統合分野」として学びの多い実習としていく必要がある。そして、実習の学習成果を客観的に評価するためには、在宅看護実習の特徴や新カリキュラムを踏まえた評価のあり方を検討することは重要であると考えられる。そこで在宅看護実習の評価の文献検討を通して、評価のために用いたデータの種類、評価者の別、評価時期、新カリキュラムに対応した評価の視点等について、評価の動向を分析し、在宅看護実習の評価に関する教育上の課題や、効果的な実習につなげるための工夫を探ることを目的とする。

#### Ⅱ. 研究方法

##### 1. 研究デザイン

文献研究

##### 2. 文献検索期間

2013年7月から8月

##### 3. 研究対象

1997年から2013年を対象年とし、医学中央雑誌Web版（ver.5）で検索した。（訪問看護/TH or 在宅看護/AL）and（臨床実習/TH or 臨地実習/AL）and 評価/

\*茨城キリスト教大学看護学部（College of Nursing, Ibaraki Christian University）

ALというキーワードで検索したところ、68件であった。その中で原著論文は47件で、これらの検索結果のうち、在宅看護実習に関連はあるが主題が別である文献、臨地実習全体が主で在宅看護実習単独の特徴がみえない文献を除いた32文献を対象として抽出した。

#### 4. 分析方法

各論文の「文献番号」、「著者」、「タイトル」、「掲載年」、「収録誌」、「筆頭研究者」「研究目的」、「評価対象のデータ」をリストとして一覧表を作成し、分析対象とした。掲載年、研究筆頭者別の推移、評価対象のデータ、評価者の別、評価時期について、それらの度数を集計した。また、新カリキュラムに対応した評価の視点を言及した文献について確認した。さらに、研究目的を精読し、類似性に基づき分類した。

### III. 倫理的配慮

文献の使用にあたっては出典を明らかにし、研究内容は正確に読み取り分析を行い、著者の意図を侵害しないように配慮した。

## IV. 結果

#### 1. 文献数と研究筆頭者の年次推移

原著論文数は、在宅看護論が新設された2年後の1999年が1件、その後2002年が0件であった以外は、2013年まで毎年1～3件であった。全論文における研究筆頭者別の割合は「看護系短期大学教員」が17件（53.1%）、「看護系大学教員」が11件（34.4%）、

「看護専門学校教員」が4件（12.5%）であった。掲載年で見ると、「看護専門学校教員」の文献は1999～2004年までほぼ1件ずつ、「看護系短期大学教員」では、2001年以降2013年まで平均1～2件の文献がみられた。「看護系大学教員」の文献は2004年までではなく、2005年以降2013年まで1～3件みられていた。傾向としては教員の共同研究としての取り組みが多く、訪問看護師や在宅保健師が研究メンバーとして参加しているものは2件であった（井上ら、2005；内藤ら、2013）。

#### 2. 論文の種類および評価のために用いたデータ

論文の種類は紀要論文が21件で全体の60%以上を占めていた。

各文献で評価のために用いたデータは、質問紙が最も多く10件であった。各文献それぞれで実習評価に必要な独自項目を用いたものが多かったが、中山ら（2006）は、実習前後の心理状態を評価するために既存の性格尺度を用いていた。次いで評価表を用いた文献が9件であった。技術経験表を用いた文献5件では、それぞれ看護技術の到達度の評価を目的としていた。また、課題レポートやテーマレポートを用いた文献は4件あり、豊島ら（2013）は、実習終了後の課題レポートを対象とし、内容分析によって実習の学びのコアカテゴリーを見出していた。実習記録を用いた文献は4件、指導者との意見交換の内容と筆記試験結果が1件ずつみられた。また、質問紙や自己評価に記載されている自由記述の内容12件が、読み取りやカテゴリー化などで、評価の資料として用いられていた。（図1）。

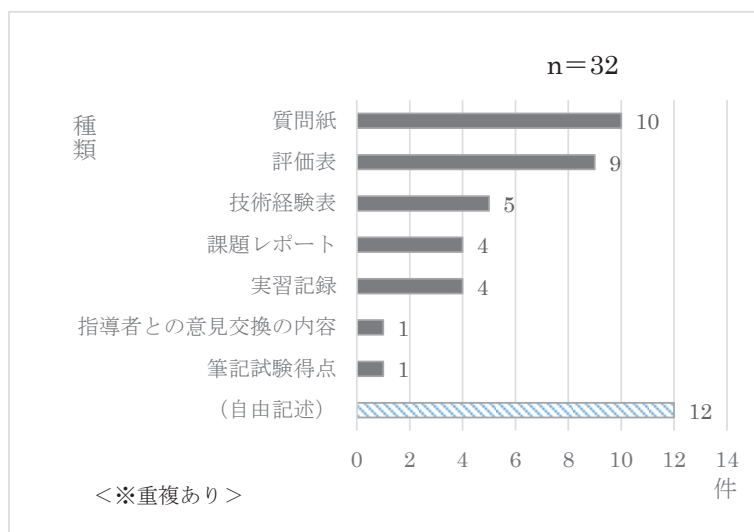


図1. 評価のために用いたデータの種類

### 3. 研究目的の概要

研究の目的の分類では、①実習方法の評価7件、②実習の学びの評価6件、③看護技術の到達度の評価5件、④実習目標の到達度の評価5件、⑤講義や学内演習の効果3件、⑥実習の受け入れに関する評価2件、⑦実習の満足度2件であった。その他、⑧指導者の指導実施度と学生の習得度の評価、⑨実習前後の心理状態と実習成績、⑩在宅看護論研究動向の文献研究が1件ずつみられた（文献の重複あり）。研究目的ごとの概要を表1に示した。

実習方法の評価を目的とした文献では、在宅看護実習が導入されて2年後に実施された近畿地区看護学校を対象とした実習展開方法調査（末吉ら，1999）や、研究者が所属する短期大学の実習方法や内容、実習目標の検討（真野ら，2001；豊島ら，2004）がみられた。また、体験シェアリングプログラムの効果（井上ら，2005）、在宅ケアアセスメントツールとして開発された Minimum Data Set-Home Care 2.0（MDS-HC2.0）を用いた看護記録の有効性（鈴木，2010）、実習直前オリエンテーションに取り入れたオリジナルDVDの有用性（清水ら，2012）など、在宅実習の学習効果を高めるための方法の工夫を評価した文献がみられた。

実習の学びの評価を目的とした文献では、実習前後の自己評価（芝田ら，2005；御田村ら，2012）、実習記録や実習終了後レポートの内容（磯邊，2008；豊島ら，2013）、在宅看護の「学び」の自己評価・機会・難易度（吾郷ら，2011）など、学生側の視点からの学びが多かった。その中で、河野ら（2000）は指導者との意見交換の内容からも学生の学びを明らかにしていた。

看護技術の到達度の評価を目的とした文献では、看護技術の到達度を、2007年に明示された「看護師教育の技術項目の卒業時の到達度」の関連から検討していた（小笠原ら，2010；伊藤ら，2011；内藤ら，2013）。

実習目標の到達度の評価を目的とした文献では、主に実習目標に対する学生の自己評価をもとに到達度を明らかにしていた（峰村ら，2003；服部ら，2004；植村，2005；三橋ら，2007）。江頭ら（2010）は、新カリキュラムの意向を先取りして作成した実習目標の達成度評価を行っていた。

講義や学内演習の教育効果を目的とした文献では、演習におけるロールプレイの効果（鷹居ら，2001；中根ら，2004）、ポートフォリオ学習および凝縮ポートフォリオ評価の有用性（吾郷ら，2008）などがみられた。

以上の文献の研究対象者は、多くは研究者が所属する看護学校・短期大学・大学の学生であったが、実習の受け入れ側を対象とした文献もみられた。河野ら（2001）は、訪問看護を受けた家庭を対象に実習の受け入れに関する要因を明らかにしていた。また、高井ら（2003）は、実習受け入れ施設を対象に、受け入れの現状と意義を検討していた。

### 4. 実習評価者と評価の時期

対象文献の実習の評価に関しては、学生の自己評価が全体の78%を占めており、教員による評価は22%であった。また評価の時期に関しては、実習前後でとなったものは15%で、85%は実習後の評価であった。

### 5. 自己評価表の評価基準

自己評価表を用いた文献で「評価基準」が示されていたのは7件で、3段階～5段階評価を用いていた。評価内容は、3段階評価では「できた」、「できなかった」、「どちらともいえない」、4段階評価では「達成できた」「まあまあ達成できた」「あまり達成できなかった」、「達成できなかった」などで示されていた。また5段階評価では「十分学んだ」「まあまあ学んだ」「どちらともいえない」「あまり学べなかった」「全く学べなかった」や、「看護援助に活用できる」「アセスメントできる」「現状把握している」「理解している」「分からない」などであった。

### 6. 新カリキュラムに対応した評価の視点を言及した文献について

該当文献は3件であった。清水ら（2012）は、新カリキュラムでは臨地実習での学び、すなわち訪問看護ステーション実習がカギであるとして、事前に在宅のイメージを形成する目的でオリジナルDVDを作成したことが、内発的動機づけを高め、不安の軽減と緊張緩和につながったと評価していた。看護技術の視点からは、訪問看護実習における学生の看護技術は、「厚生労働省による卒業時の到達度」をそのまま適用することが難しいとし、到達度というより、実施から見学までを含めて「経験したかどうか」を確認し評価することが適していると述べていた（内藤ら，2013）。さらに江頭ら（2010）は、新カリキュラムスタートに先立ち、その意向を鑑み、実習目標の一つに「終末期の看護を理解できる」を加え、地域在宅医療が行われている診療所での実習を行った。その結果、83%の学生が終末期の看護が理解できたという評価を得ていた。

表1. 研究目的ごとの概要

	研究目的	年	対象者	評価対象のデータ
実習方法の評価	在宅看護論実習の展開方法に関する基礎資料を得る	1999	近畿各府県の3年課程看護学校看護短期大学、看護大学97校	質問紙(実習場所と時期、訪問看護ステーションの状況と指導者の役割、実習項目など)
	「体験シェアリング」に参加した学生の目標達成度および学びの様相を明らかにし、プログラムの効果を検討する	2005	3年課程2年生45名	体験シェアリング記録(自己評価、自由記述)
	在宅看護論実習における実習目標および教育目標を検討する	2004	看護短期大学3年生62名	実習評価表(学生・教員)、学生の自由記述
	実習方法・内容、およびその教育効果を考察し、より効果的な在宅看護実習の展開について検討する	2001	2000年度履修短期大学3年生50名	終了後レポート、在宅看護実習評価(教員)、質問紙
	看護上の問題点の抽出にMDS-HC2.0を用いることで、少ない訪問回数で、情報整理・アセスメントを導くことが可能かを検討する	2010	看護短期大学3年生57名	MDS-HC2.0を用いた看護記録(受け持ち患者情報、看護問題)
	自作の在宅看護論自己評価表の有効性の検討	2011	3年課程看護専門学校3年生34名・看護短期大学3年生77名計111名	在宅看護論自己評価表
	在宅看護論実習の直前オリエンテーションで、オリジナルDVD教材を用いた異なる2つの展開パターンを比較分析し、有用性を明らかにする	2012	大学看護学科3年生45名	独自の質問紙調査と自由記述内容
実習の学びの評価	平成11年度の在宅看護論実習の現状を振り返り、実習のあり方と今後の課題について明らかにする	2000	記載なし	自己評価表・自由記載 指導者との意見交換の内容
	実習前後の調査を比較して在宅看護実習の学習効果を明らかにし、今後の在宅看護実習の在り方を検討する	2005	大学看護学部4年生92名	実習前後の質問紙(理解の自己評価、感じたことの記載)
	訪問看護実習記録の概要から学習内容を明確にし、今後の臨地実習の方法や評価の方向性を見出す	2008	看護短期大学平成19年度3回生	実習記録、テーマレポート
	「在宅看護の学び」の項目の質問紙を用いて実態調査を行い、質問紙の妥当性の検討と現状の把握をする	2011	短期大学看護学部3年生81名	「在宅看護の学び」の質問紙(自己評価・機会・難易度)
	在宅看護論実習前後の評価項目の得点から実習における学びを検討し、実習において学習効果が低かった項目から実習カリキュラムの課題と学習支援の方法を検討する	2012	3年課程看護専門学校3年生34名・看護短期大学3年生77名計111名	実習前後の自己評価表
	臨地実習終了後の学生の学びから、臨地実習の学びの内容を明らかにする	2013	看護系大学4年生76名	実習終了後の課題レポート
看護技術の到達度 の評価	学生の経験した看護技術や訪問看護の実施状況から、現在の指導体制や教育内容を検討し、今後の教育方法を検討するための資料とする	2007	2期生54名・3期生53名	在宅ケア実習基本看護技術・訪問看護実施状況の自己記録
	在宅看護実習における「技術到達度表」を用いた自己評価を通して、次年度に向けての課題を検討する	2009	平成20年度の看護学科4年次学生69名	実習前後の技術到達度表の自己評価
	技術到達度表を用いて、在宅看護実習における技術の習得状況および今後の教育上の課題を明らかにする	2010	平成21年度看護学科4年生69名	「看護師教育の技術項目の卒業時到達度表」の自己評価
	技術項目の卒業時到達度表を用いて臨地実習における技術の習得状況と今後の教育上の課題を明らかにする	2011	平成18年度入学の看護学科学生68名	「看護師教育の技術項目の卒業時到達度表」の自己評価
	訪問看護臨地実習での看護技術の到達度について、卒業時到達度の関連から検討する	2013	専門学校3年生43名・看護短期大学3年生76名計119名	学生記入の技術経験表、訪問Nsと教員の判断
実習目標の到達度 の評価	「地域看護実習」の自己評価と実習の満足度の分析を行い、実習の到達度を明らかにし、今後の課題を検討する	2003	看護専門学校3年生99名	実習の自己評価表、満足度と理由の記述
	訪問看護ステーション実習における実習目標の到達状況を評価し、今後の実習のあり方について示唆をえる	2004	短期大学3年生76名	自己評価表・実習記録(感想・学びの記述)
	実習終了後に訪問看護ステーション実習における学生の達成度に関する自己評価から実習の成果について評価する	2005	短期大学3年生48名	実習の達成度に関する自己評価、自由記述
	在宅看護実習の内容を調査し、目標到達状況との関連について検討する	2007	大学看護学部生72名	学生の实習記録、教員の实習評価
	新カリキュラムの考え方を先取りした実習目標の到達度を明らかにする	2010	看護専門学校3年生42名	質問紙(実習目標達成度の自己評価)
講義や学内演習の教育 効果	訪問看護実習の準備として在宅看護論演習にロールプレイを導入したことの教育的効果の検討	2001	短期大学看護学科3年生82名	学生が作成した訪問日のケア計画内容、演習の学びレポート
	校内実習のデモンストレーション・ロールプレイングが学生の在宅看護のイメージ化に役立ったか否かを明らかにし今後の課題を検討する	2004	看護専門学校2年生76名	質問紙(デモンストレーション、ロールプレイング、校内実習について、感想の自由記述)
	在宅看護学においてポートフォリオ学習を行い、凝縮ポートフォリオ評価の有用性を検討する	2008	短期大学3年生72名	凝縮および元ポートフォリオ・在宅看護実習の教員評価、講義の筆記試験得点
実習の受け入れに 関する評価	在宅療養者の在宅看護実習の受け入れに関する要因を明らかにする	2001	K医科大学病院から訪問看護を受けた家庭276世帯	質問紙(性別、経済、家の広さ、入院時の学生・看護師の態度や言動、訪問看護婦の態度や言動など)
	実習施設の受け入れの現状と施設側の実習受け入れ意義を明らかにする	2003	県保健所5か所、市町村(保健所・保健センター)47か所、訪問看護ステーション69か所の実習関係者	質問紙(実習受け入れ状況、メリット・デメリット、自由意見)
実習の満足度	「地域看護実習」の自己評価と実習の満足度の分析を行い、実習の到達度を明らかにし、今後の課題を検討する	2003	看護専門学校3年生99名	実習の自己評価表、満足度と理由の記述
	在宅看護論実習における各実習施設の満足度とその理由を分析し、実習施設の環境調整について検討する	2003	看護短期大学3年生125名	質問紙(満足度評価と理由の記述)
指導者の指導実施度 と学生の習得度	在宅看護論実習における実習指導者の指導実施度と実習生の習得度の実態を調査し、関連を検討する	2007	実習指導者22名:2年課程看護学校2年生86名	指導実施度評価用質問紙・習得度評価用質問紙
実習前後の心理状態 と実習成績	長期実習前後のSTAI、LOC、対人・達成領域別ライフアセスメント尺度を調査し、尺度の変化と実習成績との関係を検討する	2006	看護系短期大学3年生80名	実習前後の質問紙(性格尺度)、実習成績
在宅看護論研究動向 の文献研究	在宅看護論が新設された当初からの研究動向を分析し、在宅看護論の教育上の課題を明らかにする	2009	1997年～2007年を対象とした文献(原著論文80件)	

※内容による文献の重複あり

## V. 考 察—今後の課題—

今回の在宅看護実習の評価に関する対象文献では、在宅看護論が新設された1997年以降、年度ごとの論文数はほぼ同数であった。研究者のほとんどが所属施設である看護学校・短期大学・大学の教員であり、実習施設側のメンバーが入っている研究は少ないことがわかった。また、論文の種類は紀要論文が60%以上を占めており、ほとんどが所属校の実習や演習に関する評価であった。教員が同行訪問を行っていること示されていたのは1件（真野ら，2001）であり、在宅看護実習ではほとんどが訪問看護師の同行訪問で行われる。そのため、学生がどのような学びをしたかを把握するためには、実習施設側の評価も重要となる（内藤ら，2013）。また、実習の受け入れという切り口からの研究（河野ら，2001；高井ら，2003）もみられ、今後は、実習の受け入れ側と共同で行う研究や、施設側の評価をもとに行う研究が増えることが必要ではないかと考える。

評価の元になるデータの特徴としては、学生が実習で体験・経験したことの内容を記述したものを多く用いる傾向であった。学生自身の言葉から実習の効果や達成度を評価することは、評価の参考になる（植村，2005）が、学生が言語化しないことは活かすことができない。また、体験の意味を掘り下げることが教員の大きな役割となる（豊島ら，2004；三橋ら，2007）。臨地実習で学生が体験したことを把握するためには、学生が真実を記述することが必要である。レポートや質問紙の記述のみに頼らず、インタビューなども取り入れ、在宅実習のありのままの現実を示すデータを得るための方法も検討する必要があると考える。

学生の自己評価をデータとした文献が多いのも特徴的であった。実習の形態が同行訪問であるということは、今後も変わらないとすると、教員は事後評価に頼らざるを得ない状況である。教員が実際に学生の実践場面を見る機会が限りなく少ない訪問看護ステーション実習では、学生の自己評価だけでは、過大評価、過小評価の可能性もあり、他者評価との関係を見ていくことが重要（峰村ら，2003）であると考えられる。在宅看護実習では形成評価がしにくいことから、カンファレンスで学生の学びを確認するための工夫が有効であることが示されていた（井上ら，2005）。また、4者間のプロセスレコードの活用（御田村ら，2012）は、学生がその時何を考え、療養者や家族はどう反応し、訪問看護師はどのような看護を提供したのかがわかるこ

とからも評価の資料として効果的であると考えられる。

看護技術経験に関する評価では、卒業時到達度の検討を行った文献が多かった。訪問看護ステーション実習では訪問回数が限定されることや、見学実習が主になる場合が多いことが特徴であり、在宅看護実習では「実施頻度」や「在宅看護での重要度」を加味して到達度を評価する必要があること（小笠原ら，2010）、他領域との関連も検討することが重要であることが示されていた。さらに、技術の評価とともに、対象の価値観にどれだけ寄り添えたかを評価する視点も求められている（御田村ら，2011）ことがわかった。

さらに、評価基準の表現が多様であり、抽象的で達成の判断に迷うものがあった。自己評価に頼らざるを得ない状況であるからこそ、なおさら評価基準を明確にする必要があると考える。実習における評価は、在宅看護実習に限らず、客観的な評価の難しさや、教員間の評価の違いなどの困難に直面している。具体的に誰が見てもわかりやすく設定されていれば、目標達成について容易に評価することができる（舟島，2013）ことから、まず実習目標そのものを見直す必要があると考える。

新カリキュラムでは「在宅で提供する看護を理解し基礎的な技術を身につけ、他職種と協働するなかで看護の役割を理解する内容」「在宅の終末期看護に関連する内容」（木下，2009）が加わった。実習では他職種と協働するなかで看護の役割を理解するために訪問看護の場に加え、多様な場で実習を行うことが望ましいとされている。今回の文献では、新カリキュラムに対応した評価の視点を言及した文献はわずかであった。在宅終末期看護に関しては、すべての学生が実習で体験できる状況にはないが、今後は新カリキュラムに即した教育内容と評価方法の検討は課題であると考えられる。

## VI. まとめ

在宅看護実習に関する文献から、実習評価に関する現状を把握した。医学中央雑誌 Web 版 (ver.5) より「在宅看護」「臨地実習」「評価」をキーワードとし、1997年から2013年の原著論文32件を対象とした。その結果、筆頭研究者は短期大学教員、大学教員の順で多く、約7割が紀要論文であった。研究目的は、実習方法の評価、学びの評価、看護技術や実習目標の到達度の評価が多く、主に学生の自己評価をデータとしていたが、内容や評価基準のばらつきがみられた。在宅看護論の特性として、教員が実習に同行することは

ほとんどないため事後評価に偏っていた。教員が公正に評価するためには、他者評価との関係もみることや評価基準や実習目標の妥当性を検討することなど、望ましい評価のあり方に対する課題が示唆された。また、他職種と協働するなかでの看護の役割や終末期看護など、今後は新カリキュラムに即した教育内容と評価方法の検討も課題であると考える。

#### 引用文献

- 江頭典江, 磯邊厚子 (2010) . 新カリキュラムにおける在宅看護実習の方向性について—臨地実習を終えた学生にアンケート調査を行って—, 京都市立看護短期大学紀要, 35, 51-58.
- 舟島なをみ (2013) . 看護学教育における授業展開質の高い講義・演習・実習の実現に向けて, 医学書院, 222-225.
- 長谷川珠代, 鶴田来美, 五十嵐久人他 (2007) . 在宅ケア実習における基本的看護技術実施と課題, 南九州看護研究誌, 5 (1) , 53-60.
- 服部素子, 能川ケイ, 西浦郁絵他 (2004) . 訪問看護ステーション実習における学習効果—新カリキュラムでの実習目標の到達状況—, 神戸市看護短期大学部紀要, 23, 47-54.
- 吾郷ゆかり, 吾郷美奈恵, 山下一也他 (2008) . 在宅看護学におけるポートフォリオ評価, 島根県立短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 2, 117-124.
- 吾郷ゆかり, 祝原あゆみ, 栗谷とし子 (2011) . 「在宅看護の学び」の実態と評価尺度の信頼性, 島根県立短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 5, 201-210.
- 磯邊厚子 (2008) . 訪問看護ステーション実習で学生は何を学んだか—実習期間の拡大と実習評価を取り入れて—, 京都市立看護短期大学紀要, 33, 21-27.
- 井上幸子, 野村実千江, 八束育子 (2005) . 訪問看護実習におけるリフレクションプログラム「体験シェアリング」の効果, 日本看護学会誌, 14 (2) , 77-84.
- 伊藤まゆみ, 真砂涼子, 鈴木珠水他 (2011) . 基礎看護技術教育の現状と課題—技術項目到達度表の分析から—, 群馬パース大学紀要, 12, 45-53.
- 小林和成, 王麗華, 矢島正榮他 (2009) . 在宅看護実習における学生による基本的技術の自己評価の試み, 群馬パース大学紀要, 8, 21-28.
- 河野由美子, 森垣梢, 萬田悦子他 (2001) . 訪問看護実習における学生の受け入れに影響する要因, 日本看護学会 第31回地域看護, 33-35.
- 河野益美 (2000) . 訪問看護実習の現状と課題, 藍野学院紀要, 14, 93 - 99.
- 木下由美子 (2009) : 新版在宅看護論 (1) , 医歯薬出版, 266-267.
- 真野佳子, 羽原美奈子 (2001) . 在宅看護実習の展開と評価 (第1報) —本学における在宅看護論と在宅看護実習—, 市立名寄短期大学紀要, 33, 11-19.
- 三橋美和, 田中陽子, 堀井節子他 (2007) . 在宅看護実習の評価と課題—医学部看護学科1期生の実習評価—, 京都府立医科大学看護学科紀要, 16, 39-46.
- 峰村淳子, 中根洋子 (2003) . 本校の「地域看護学実習」の成果と今後の課題—学生による学習内容の自己評価結果と実習の満足度の分析を通して—, 東京医科大学看護専門学校紀要, 13 (1) , 1-11.
- 御田村相模, 内藤恭子, 山本美弥他 (2011) . 自己評価表を活用した在宅看護論実習評価の試み, 日本看護学会 第41回地域看護, 107-110.
- 御田村相模, 内藤恭子, 大井修三 (2012) . 自己評価票を用いた在宅看護論教育効果の検討2—実習後の尺度別・下位項目別得点から学びを考える—, 第42回 日本看護学会論文集 地域看護, 225-228.
- 内藤恭子, 深谷由美, 井奈波秀他 (2013) . 訪問看護臨地実習における看護技術の経験に関する報告Ⅱ, 第43回 日本看護学会論文集 地域看護, 167-170.
- 中根洋子, 川崎千鶴子 (2004) . 在宅看護のイメージ化への校内実習の効果—ロールプレイング終了後のアンケート分析を通して—, 東京医科大学看護専門学校紀要, 14 (1) , 13-19.
- 中田芳子 (2009) . 在宅看護論研究の動向と教育上の課題—科目新設時からの文献研究より—, 東海大学短期大学紀要, 43, 87-93.
- 中山和美, 寺田眞廣, 星山佳治他 (2006) . 看護学生の長期実習前後の心理状態と実習成績の関連に関する研究, 昭和医会誌, 66 (1) , 29-37.
- 小笠原映子, 横堀ひろ, 小林和成他 (2010) . 在宅看護領域における看護技術教育の現状と課題—技術項目達成度表の分析から—, 群馬パース大学紀要, 10, 101-107.

- 芝田ゆかり、櫻井しのぶ、岡部充代他（2005）．在宅看護実習における学習効果－実習前後の調査を比較して－，三重看護雑誌，7，23-32.
- 清水美和子，田村直子，棚橋さつき他（2012）．在宅看護論実習におけるDVD教材を用いた直前オリエンテーションの有用性 異なる2つの展開パターンを比較して，高崎健康福祉大学紀要，11，99-110.
- 清水裕子（2007）．在宅看護論実習における指導実施度と習得度の検討，日本看護学教育学会誌，16（3），29-36.
- 末吉公子，曾根愛子，湯舟貞子他（1999）．在宅看護論実習展開方法－近畿地区看護学校の調査結果より－，日本看護学会 第30回地域看護，80-82.
- 鈴木育子（2010）．在宅看護論実習におけるMinimum Data Set-Home Care 2.0の有効性，医療保健学研究，1，135-144.
- 鷹居樹八子，中尾理恵子，門司和彦他（2001）．在宅看護論実習前のロールプレイにおける看護内容評価と教育的効果，長崎大学医療時術短期大学紀要，14（1），111-116.
- 高井俊子，岡本啓子（2003）：在宅看護実習を受け入れる実習施設の現状と実習受け入れの意義，看護教育，44（9），794-799.
- 種市ひろみ，熊倉みつ子（2011）．在宅看護論における終末期看護教育への示唆－終末期看護教育の文献検討による－，獨協大学看護学部紀要5（2），13-21.
- 豊島泰子，山崎律子（2004）．在宅看護論実習内容の検討－学生の自己評価記録の分析より－，聖マリア学院紀要，19，93-96.
- 豊島泰子，彌永和美，春名誠美他（2013）．在宅看護学実習における学びの評価，四日市看護医療大学紀要6（1），1-8.
- 植村小夜子（2005）．訪問看護ステーション実習の達成度と課題－2004年度の学生の自己評価からの検討－，京都市立看護短期大学紀要，30，97-103.
- 山崎律子，長尾秀美，今村桃子（2003）．在宅看護論実習における満足度，聖マリア学院紀要，18，19-22.